

楽しむ環境作り

テレビも新聞も、にぎやかに書き立てた。

昨年7月、サッカー女子ワールドカップ（W杯）で日本が優勝。大野忍、近藤ゆかり、矢野香子の代表3選手を輩出した横須賀市のサッカーチーム

「横須賀シーガルズ」にも取材が殺到した。クラブチームのえ選手が集まりにくいシーガルズだけに、指導陣は色めき立った。「これでようやく人が集まる」

しかし、「なでしこ効果」は、皆無だった。「さっぱり人が集まらなかつた。期待は大きく外れた。でも、女子サッカーの現況を考えると、やむを得ないと

底辺拡大



も思った」と女子チーク監督の龜田勝昭さん（47）は振り返る。

誰もがサッカーを楽しめる環境を作り、底辺拡大を図る横須賀シーガルズ。神奈川女子サッカーワールドカップでの開催地である横須賀市は、横須賀フットサルクラブで

◎ 5 ◎

女子サッカーが抱える問題は、トップレベルの置かれた環境に凝縮される。観客数が少なく、ショービジネスとしての基礎が弱いため、プレーだけで食べていける選手はまれ。とりわけ影響が大きいのが、中学世代だと知られている野球など。いう。小学校を卒業すれば、強化はW杯優勝と「女子サッカープロジェクト」を起こし、女子選手の強化と育成、普及を進めていく。ただ、強化はW杯優勝という形で成果を上げたが、底辺の人口拡大が進んでいないのが実情だ。

龜田さんは「今回のW杯優勝は基盤が整っていないのに結果が出た」というのが正直な感想。これを底上げの成果と見る向きもあるが、違う。今、育成と

「シーガルズは先駆者でありたい」。龜田さんは、「女子サッカー史を切

るのだ。『本來は中学生こそ、飛躍の時期なのだが……』と龜田さん。技術の吸収が著しく大きな成長を見込める「ゴールデンエイジ」のまっただ中にあるのに、振り向いてくれない。指導者たちは悔しい思いを抱えている。

日本サッカーフェスティバルでは、「一人の日本代表をこまねいでいる表よりも100人のサッカー好きを増やす」だ。龜田さんは、「どんな人でもサッカーを楽しめる環境を作り、底辺を拡大することが女子サッカー最大の課題。そうしないと可能性のある子すら見つけられない。協会もビジョンをしっかりと持つほしい」と願う。

間口広げ競技人口増やす

シーガルズは、既に活動している。06年にDPOとして法人格を取り組み、総合型スポーツ

クラブへと一步踏み出した。財政基盤と環境を構築して、トップレベルで運営し、総合型スポーツ

おわり